

ヴェネツィアの仮面カーニバルの成立と展開に関する研究 - 劇場型都市空間における仮面の役割 -

著者	勝又 洋子
号	18
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	学術(情)博第158号
URL	http://hdl.handle.net/10097/59883

氏名（本籍地）	かつまた ようこ 勝又 洋子
学 位 の 種 類	博士（学術）
学 位 記 番 号	学術（情）博第 158 号
学位授与年月日	平成 24 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研 究 科、専 攻	東北大学大学院情報科学研究科（博士課程）人間社会情報科学専攻
学 位 論 文 題 目	ヴェネツィアの仮面カーニヴァルの成立と展開に関する研究 ―劇場型都市空間における仮面の役割―
論 文 審 査 委 員	（主査） 東北大学 准教授 窪 俊一 東北大学 教授 関本英太郎 東北大学 教授 小林 一穂 東京電機大学 教授 石塚 正英 東北大学 准教授 森田 直子

論文内容の要旨

序章 研究目的と研究資料

ヨーロッパ各地で行われるカーニヴァルのなかでも、ヴェネツィアの仮面カーニヴァルは、最も華麗なカーニヴァルとして知られるが、踏み込んだ研究はあまりなされていない。その理由は、ファッションな仮装カーニヴァルのイメージが先行していること、ポレオンによるヴェネツィア共和国崩壊とともに、ヴェネツィアの仮面カーニヴァルが禁止され、200 年間中断されたことによる。1979 年再開後は共和国時代の仮面カーニヴァルの記録の掘り起こしと採録が行われている。ヴェネツィアのカーニヴァルは仮面なくしては考えらず、ヴェネツィアの仮面は華麗な衣装と結びついて、ルネサンス期に他のヨーロッパ地域のカーニヴァルの仮面とは異なる独自の展開を遂げた

元来仮面は素顔を隠すという特性をもつことから、宗教的な祭礼で神や人間を超えた存在に成り代わるために、または自然の象徴などに用いられた。仮面はこうした非日常の時間と空間を演出するための装置であり、カーニヴァルという非日常的な限られた時間と空間において、日常を逸脱して自由に振舞う装置として庶民に好んで用いられた。一方ヴェネツィア共和国において、仮面はカーニヴァルの仮装の道具としてだけでなく、日常において一つの役割を担っている。こうした日常における仮面の使用は他のヨーロッパ地域だけではなく、世界でも稀である。「仮面の日常化」というヴェネツィア固有の仮面の役割は、アドリア海の渦に人工的に建設された水上都市ヴェネツィア特有の劇場型都市空間を背景に、国家的行事として展開したカーニヴァルと結びついて生まれたと考えられ、本論ではこの劇場型都市空間とカーニヴァルと結びついて、ヴェネツィア固有の仮面の近代的役割が生まれたと捉えている。

第Ⅰ章 カーニヴァルと仮面の起源

第Ⅰ章はヴェネツィアのカーニヴァルと仮面を理解するための歴史的認識として、カーニヴァルの起源と意味を整理し、中世における謝肉祭への展開を述べた。さらにヴェネツィアのカーニヴァルの重要なアイテムである仮面の起源・意味・役割について整理した。

仮面の起源について確かなことはわかっていないが、古代から伝統行事には仮面を用いた行事が多くあり、カーニヴァルと仮装そして演劇の発生は互いに関連しており、その起源は古代ギリシアのディオニューソスの祭礼に遡ると考えられている。元来仮面は死者の顔を覆うものと考えられ、それが

この世に帰って来る死者、幽霊、悪霊という意味を持つようになった。さらにはそれが網で顔を覆うもの、仮装した人＝仮面をあらわすようになったと考えられている。

カーニヴァルの起源もさだかではないが、新年を祝う行事はほとんどあらゆる民族のもとで行われていた。この習慣が古代ギリシアに伝わり、古代ローマを経てヴェネツィアに伝えられたと考えられている。ヴェネツィアのカーニバルは古代ギリシアのディオニューソスの祭りを受けついだローマ時代のバッコスの祭りに遡るといわれる。ディオニューソスの祭りの枠内で行われた仮装行列がカーニバルの起源であり、ヴェネツィアのカーニバルの仮面カーニバルの由来とされる。こうしたキリスト教以前の収穫感謝の行事が中世キリスト教の暦に取り入れられて謝肉祭と結びつくには、イタリア・ルネサンス期に農耕型の村落生産共同体から、貨幣・為替経済型の都市型共同体であるヴェネツィア、ジェノヴァ、フィレンツェなど都市国家の興隆で、商業型都市国家の生活スタイルができてきたためである。

第Ⅱ章 ヴェネツィアの仮面カーニバルの成立と展開への主要な前提

第Ⅱ章は、ヴェネツィアの仮面カーニバル成立と展開の主要な前提として、ヴェネツィアの仮面カーニバルの特徴を明らかにするために、その起源とされるディオニューソスの祭りの特徴を調べた。ディオニューソスの祭りの詳細は残されていないが、エウリピデスの悲劇『バッコスの信女』にディオニューソスの祭りの原型が描かれていることから、この作品を史料としてディオニューソスの祭りの特徴を調べた。その結果、ディオニューソスの祭りは仮面行列、聖餐儀礼、舞踏で成り立ち、ディオニューソスの祝祭のそれぞれの特徴が、形を変えて、ヴェネツィアの仮面カーニバルに受け継がれていることがわかった。なかでも仮面行列は最もよくヴェネツィアの仮面カーニバルに継承され、ヴェネツィアの仮面カーニバルを特徴づけており、ヴェネツィア共和国のアイデンティティの成立と関わっている。

第Ⅲ章 ヴェネツィアにおける仮面カーニバル成立の背景

第Ⅲ章ではヴェネツィアにおける仮面カーニバル成立に、十字軍遠征が影響したと考え、十字軍遠征をヴェネツィアの仮面カーニバルとの関連で述べた。十字軍はイスラム圏からのキリスト教の聖地エルサレム奪回を目的として組織され、中世ヨーロッパを揺り動かした歴史的な事件である。十字軍遠征は軍港を抱えるヴェネツィア共和国が東地中海交易の制海権を握るという絶大な政治・経済力をもたらしただけでなく、社会構造の変化と文化形成に大きな影響を与えた。その最大の影響は、古代ギリシア・ローマの文化と思想の再発見であり、ヴェネツィアのカーニバルが古代ギリシア・ローマに由来するとされる理由はここにある。

さらに本章ではヴェネツィアの仮面カーニバルがイタリア・ルネサンス期に爛熟したことから、未だその発生と終焉について諸説あるルネサンスの始まりと終焉についても整理した。

第Ⅳ章 ヴェネツィアの仮面カーニバルの成立と展開

ヴェネツィアの仮面カーニバル成立過程においては、聖餐儀礼的な動物の擬似処刑、舞踏、サーカス的な出し物が中心となって行われた。これらの擬似的な儀礼や見世物は、むしろローマから継承した「パンとサーカス」的な政治技術と捉え、ヴェネツィアの仮面カーニバル展開のための前史と捉えている。これらの儀礼的な見世物は十字軍の派生現象として生まれ、国家のアトラクションという形で、国家形成の理念と結びついたことにヴェネツィアのカーニバルの特徴がみられる。その特徴的な見世物は、「動物の擬似処刑」「ヘラクレスの力」「トルコ人の飛行」「ムーア人の舞踏」である。なかでも「動物の擬似処刑」と「ヘラクレスの力」はウルリヒの海戦の戦勝記念として、ヴェネツィア共和国の軍事力の強さを示すために、毎年カーニバル最後の木曜日に最大のイベントとして行われた。この時代、カーニバルの中心的な催しが、伝統の収穫感謝の行事を受け継ぐのではなく、戦勝記念として行われたことに、ディオニューソスの祭りとも他のヨーロッパ地域のカーニバルと

も異なる、ヴェネツィア独自のカーニヴァルの成立がみられる。

第V章 ヴェネツィアの仮面カーニヴァルの展開 ―劇場型都市空間における仮面の役割―

第V章はヴェネツィアの仮面カーニヴァルの展開を劇場型都市空間との結びつきで捉え、この派生現象として生じた仮面の日常化により、ヴェネツィアにおいて仮面の近代的な役割が生じたと捉えた。その契機となったのはレパントの海戦直後に行われたカーニヴァルの仮面行列である。レパントの海戦でヴェネツィア海軍は勝利したものの、その弱体化は明確であった。ヴェネツィア共和国が衰退の兆しを見せ始めたイタリア・ルネサンス期に、あたかもそのほころびをつくろうかのように仮面行列は華麗で豪華さを増し、ヴェネツィアの仮面カーニヴァルは国家の理念形成において、前章で述べたサーカス的な見世物とは対照的な文化的な側面を担った。劇場型都市空間を背景に展開した仮面カーニヴァルとの結びつきで、ヴェネツィアにおいて仮面の近代的な役割が生まれた。ヴェネツィアの国家形成の原風景となるのは「海との結婚」の儀式であり、仮面カーニヴァルの仮面行列が、この儀式を物語へと展開させたと考える。このような物語空間の演出は、前述のヴェネツィア固有の劇場型都市空間が可能にした。その根底にはヴェネツィア共和国を象徴を仮面に託し、ヴェネツィア人は仮面行列に国家的な帰属意識をもち、仮面に同国人としてのアイデンティティを重ねたことにある。その前提となるのは物語空間の演出の原風景となる「海との結婚」であり、その祝祭的展開として全市民的な規模の仮面行列があり、この仮面カーニヴァルと結びついて生まれたヴェネツィア固有の仮面の日常的な役割がある。先述したように仮面は非日常の空間を演出するための装置であるが、非日常が日常化したことに世界でも稀な仮面の使用が認められる。しかしヴェネツィア共和国の終焉とともに、ヴェネツィアにおけるこのした仮面の役割は終焉した。

第VI章 結論 ―劇場型都市空間と仮面カーニヴァルそして仮面の役割―

第VI章は結論として、劇場型都市空間と仮面カーニヴァルそして仮面の役割の結びつきを軸に、前章までの論述をふまえて本論の論旨をまとめた。ヴェネツィア共和国は、実質上メディチ家を君主として置くフィレンツェとは異なり、共和制国家体制を実現した。ヴェネツィアの共和制の理念形成に仮面カーニヴァルが深く関わり、ここから仮面の近代的な役割が生まれた。こうした仮面とカーニヴァルの役割は、現代的な仮面の役割に通じる萌芽と考えられ、ヴェネツィアの仮面カーニヴァルの特徴と結論付けた。

ヴェネツィア固有の仮面の役割であるが、ヴェネツィア人が乗り込んだ一つの巨大な船に掲げられた船首像のような象徴的な役割をもつと考える。ヴェネツィアはアドリア海に浮かぶ人工都市であり、水上舞台のような形状をしている。ヴェネツィア共和国の人は、そもそも自然に生まれついてこの島に住んだわけではなく、6世紀頃ゲルマン諸民族に追われて、意志をもってアドリア海の潟にこの都市を建設し住み着いた人々である。こうして成立したヴェネツィア共和国を存続させるためには、政治的にも経済的にもそして都市形状的にも過酷な環境と戦わなければならなかった。それ故ヴェネツィアは共同体意識の共有が必要であり、人の感情を一つに纏め上げるアイデンティティの象徴となるアイテムが求められた。仮面はヴェネツィアという共同体のアイデンティティとその運命を象徴する、言い換えれば、ヴェネツィアという都市共同体における兄弟関係的な共同体意識を象徴する、ヴェネツィアという一つの巨船に掲げられた船首像のような役割を果たしたと考えられる。ヴェネツィアにおいて祭りは国家を支える文化的行事であり、仮面はヴェネツィアの人々のアイデンティティとなるものであった。このような役割を担ったことで、ヴェネツィアの仮面は、古来仮面が果たしてきた神性の象徴とは異なる、理念の造形的な複製という近代的な役割を担ったと結論づけている。

論文審査結果の要旨

近年ヴェネツィアの仮面カーニバルは、その華麗な衣装と仮面が世界中の人々の人気を集めているが、こうしたファッションナブルなイメージが先行しているため、また 1779 年ナポレオンによるヴェネツィア共和国崩壊と同時に 200 年間中断されていたため、1979 年再開後は、共和国時代のヴェネツィアの仮面カーニバルの掘り起こしと採録が活発に行われているのが現状であり、本格的な研究は少ない。本論文は、歴史的記録と先行研究をふまえて、ヴェネツィアの仮面カーニバルの成立と展開を、水上都市ヴェネツィア特有の劇場型都市空間との結びつきで捉え、さらにこの仮面カーニバルと劇場型都市空間を背景に生まれたヴェネツィア固有の仮面の役割を中心として論じたものであり、序論を含め全 7 章からなる。

序章は序論であり、研究の背景・目的と論文の全体構成をまとめている。

第 I 章では、ヴェネツィアの仮面カーニバルを理解するための歴史的認識として、カーニバルの起源と意味を整理し、中世における謝肉祭への展開を述べた。さらにヴェネツィアのカーニバルの重要なアイテムである仮面の起源、意味、役割について整理している。

第 II 章では、ヴェネツィアの仮面カーニバルは古代ギリシアのディオニューソスの祭りに由来するとされることから、ヴェネツィアの仮面カーニバルの特徴を明らかにするために、エウリピデスの悲劇『バコスの信女』を史料として、ディオニューソスの祭りの特徴を調べている。

第 III 章は、ヴェネツィアの仮面カーニバル成立と展開に十字軍遠征が影響したと捉え、十字軍遠征をヴェネツィアの仮面カーニバルと関連付けて述べている。

第 IV 章はヴェネツィアの仮面カーニバルの成立過程において、古代ローマの政治技術「パンとサーカス」的な見世物としての儀礼と催しが行われたと捉え、ディオニューソスの祭りの特徴と関連付けて述べている。これは新しい知見である。

第 V 章は、ヴェネツィアの仮面カーニバルが、レパントの海戦（1571 年）を契機に華麗で豪華な仮面行列を中心に行われ、劇場型都市空間を背景に仮面の日常化が生まれたことを述べている。ヴェネツィアにおいては日常化した仮面が「もう一つの顔」として機能したと捉えたことは、ヴェネツィアの仮面特有の近代的な役割を示しており、非常に意義深い。

第 VI 章は、結論と今後の課題を提示している。

以上要するに、本論文は、ヴェネツィアの仮面カーニバルと仮面がヴェネツィア共和国とヴェネツィア人のアイデンティティの形成に関わると捉え、古来の仮面の役割と異なる近代的な仮面の役割を見出しており、比較宗教学・民俗学・社会学・芸術学などの枠組みと方法論を用いて厳密かつ独創的な分析と検討を行なった優れて学際的な研究であって、人間社会情報科学の発展に寄与するところが少なくない。よって本論文は博士（学術）の学位論文として合格と認める。